九大広報

KYUSHU UNIVERSITY CAMPUS MAGAZINE

Vol. 130
2024 Dec.

特集1
100年前の「第九」を再演
歓喜の歌と旋律が令和に甦る

特集2
高校生が研究の醍醐味を実感！
夢に近づく夏の理工系プログラムを直撃

［ COVER／特集１ ］
九州大学「第九」日本人初演
100周年記念事業特別演奏会

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学広報課
TEL:092-802-2I30　E-mail:koho@jimu.kyushu-u.ac.jp

九州大学学生後援会
TEL:092-802-5968　E-mail:gaggkouenkai@jimu.kyushu-u.ac.jp

九州大学同窓会連合会
TEL:092-802-2I58　E-mail:sycdo-rengo@jimu.kyushu-u.ac.jp

住所変更ほか、発送についてのお問い合わせは、封筒記載の連絡先へお願いします。

■編集・発行：九州大学広報課
〒819-0395福岡市西区元岡744
■Webサイト：https://www.kyushu-u.ac.jp/
■印刷：TOPPAN株式会社
■編集協力・取材：近藤耕平、永井直美
■撮影：TOPPAN株式会社
■デザイン：株式会社G&N

◎本誌記事を転載する場合は、事前に九州大学広報課までご連絡願います。
◎「九大広報」は九州大学Webサイトでもお読みいただくことができます。

［表紙撮影協力：九州大学「第九」日本人初演 100周年記念事業特別演奏会］

総長の「記念日」

このコーナーでは、総長への取材をもとに、総長個人としての思いやこだわりなど、プライベートな一面をリアルなエピソードとともにお伝えします。

石橋達朗

2024.10.3

甘い記念日

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

これは、ふとしたきっかけで、特別な記念日が生まれる喜びを、当時、歌人として注目を集めていた俵万智さんが詠んだ歌で、記念日ブームが起きるほど話題になりました。そもそも記念日とは、特別な日や忘れられない日を指し明確な定義はないとのこと。総長にとって、就任後忘れられない特別な日は、2021年11月22日。九州大学が「指定国立大学法人」の指定を受けた日です。総長就任直後から緊張感を持って取り組んできただけに、指定されたときは感慨深いものがあったと言います。「でも、振り返る余裕なんてなかったよ。次の目標があるからね」。挑戦の日々は続きます。一方で、そんな総長がほっとできる記念日があります。7月28日、総長の誕生日です。毎年、総長が教授を務めていた本学医学部眼科学教室の医局員や秘書の皆さんが、有名ホテルに特注したフルーツいっぱいのケーキを用意してお祝いしてくれるのだとか。「僕が教授に就任した年から20年以上続いているんだよ。怒ってばかりいるボスだったけどね」と笑みを浮かべる総長。甘いケーキと医局の皆さんの優しさが、誕生日をより特別な日にしています。

INFORMATION

2024年12月24日（火）、2025年2月18日（火）

大学院人文情報連係学府（2025年4月開設）
学際シンポジウムシリーズ「接続する人文学」

人文情報連係学府の開設に関連して、
シンポジウムと大学院説明会を開催します。
※説明会のみ参加も可

12月24日（火）
■13:00〜15:50「図書館、文書館と研究データ」
■16:00〜17:00 大学院説明会

2月18日（火）
■14:00〜17:10「アートを記憶する――
アジアにおける芸術資料とアーカイブの可能性」

2025年4月
開設
九州大学大学院
人文情報連係学府

ウェル・ビーイングの実現に貢献する
高度人文情報人材養成プログラム
人文学×データサイエンスによる
「人文情報学」大学院

人文学に、
新たな翼を。

CONTENTS

九大広報 KYUSHU UNIVERSITY CAMPUS MAGAZINE Vol.130 / 2024 Dec.

01 ［九大の舞台裏］総長の「記念日」
03 ［特集1］100年前の「第九」を再演 歓喜の歌と旋律が令和に甦る
07 ［特集2］高校生が研究の醍醐味を実感! 夢に近づく夏の理工系プログラムを直撃
09 ［躍 動］学生劇団「いと」〜Italento〜
11 世界から九大へ 九大から世界へ
13 現役九大生 >>> 卒業生インタビュー
15 ［Museum Report］箱崎だより（最終回）〜「ミュージアムDX」シリーズ予告〜
16 クローズアップ九大 パラスポーツを通した共生社会の成熟に貢献
19 Connect with Alumni
21 九州大学基金

Special Report 特集1

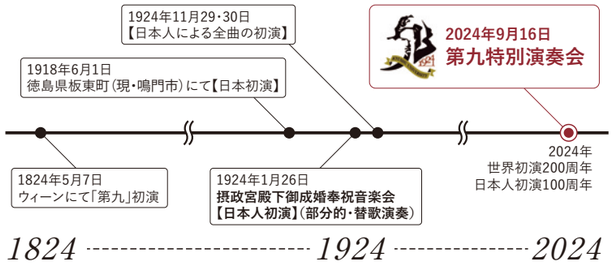
100年前の「第九」を再演
歓喜の歌と旋律が令和に甦る

「第九」日本人初演100周年記念事業

今年は、九大フィルハーモニー・オーケストラ（以下、九大フィル）の前身である九州帝国大学フィルハーモニー会が、摂政宮（後の昭和天皇）のご成婚を祝って、ベートーヴェンの交響曲第9番（通称「第九」）の第4楽章を日本人で初めて演奏して100年の節目の年です。これを記念した「九州大学「第九」日本人初演100周年記念事業」の一環として、2024年9月16日（月・祝）、アクロス福岡シンフォニーホールで九大フィルによる特別演奏会が開催されました。約1,800席のチケットは早々に完売となり、Webチケットも販売され、注目の高さがうかがえました。

国内における第九の「初演」のトピックス

国内における第九の「初演」をめぐっては、いくつかのトピックスがあります。第九が日本で初めて演奏されたのは1918年、徳島県の板東にあった俘虜収容所です。第一次世界大戦で捕虜になったドイツ兵による演奏でした。日本人による初の全曲演奏は、それから6年後の1924年の11月。東京音楽学校のオーケストラによって演奏されました。九大フィルの奉祝演奏会は、この全曲演奏より10カ月前であり、部分的かつ替歌であるものの、日本人が初めて第九を演奏したことになります。



～【プレトーク】松村晶名誉教授×鈴木優人氏～

100年前の「第九」はどんな演奏だったのか？

松村晶名誉教授（写真左）と指揮者の鈴木優人さん（同右）のプレトーク

摂政宮（後の昭和天皇）のご成婚を祝う奉祝音楽会で演奏

日本では「歓喜の歌」や「第九」として親しまれているベートーヴェンの交響曲第9番。特に、第4楽章にあるドイツ語の合唱部分は、年末に耳にすることが多いと思います。

今年は第九がウィーンで初めて演奏されて200年のメモリアルイヤーでもあります。その初演からちょうど100年後、当時の皇太子の結婚を祝う奉祝音楽会で、九大フィルの前身である九州帝国大学フィルハーモニー会が、日本人で初めて第九の第4楽章を演奏しました。その演奏は特殊なものだったそうです。では、100年前の第九はどのような演奏だったのでしょう。

演奏会前のプレトークでは、指揮者で本学客員教授の鈴木優人氏と、九州大学と第九の関わりに詳しい本学の松村晶名誉教授によって、100年前の第九の演奏について簡単なレクチャーがありました。

当時、第九を演奏した会場「福岡市記念館」のことや、医師でありながら九大フィルを創設し100年前の第九を指揮した九州大学医学部（当時、福岡医科大学）教授榊保三郎氏の話など、とても興味深い内容で、観客の皆さんも当時の演奏会をイメージしながら聞き入っている様子でした。

100年前の「第九」は替歌だった

100年前の演奏会で特筆すべき点は「替歌」で演奏されたことです。松村名誉教授の解説によると、1924年1月26日、皇太子摂政宮の迪宮裕仁親王の結婚式が執り行われ、全国各地で祝賀行事が行われたそうです。福岡ではその日の夜に、当時、福岡市天神にあった「福岡市記念館」において奉祝演奏会を開催。その演奏会の中で、九大フィルのオーケストラと、九大生や福岡の旧制中学校・高等学校・専門学校の学生と教師で構成された合唱団によって、第九の中でも有名な第4楽章が演奏されたそうです。しかも、ドイツ語ではなく、日本語の替歌で演奏されたといいます。

「天皇陛下や皇室の即位、皇紀の年など、特別な節目のために作られる歌や曲を奉祝歌といいますが、100年前の演奏は、文部省が作成した皇太子殿下ご成婚を祝う奉祝歌の歌詞をあてはめた替歌の形で演奏したようです」（松村名誉教授）

100年前の演奏に使用されたオーボエも登場

プレトークの後半では、本学の大学文書館が所蔵する100年前の演奏で使用されたオーボエが登場。明治16年に日本に輸入された1本目のオーボエとのことでした。現在のオーボエとは、吹奏感（吹いたときの感覚）や音のピッチが違うそうですが、今でも演奏可能な状態にあるとのことで、今回の演奏会の幹事でオーボエの首席奏者でもある齋藤かなさんに実際に演奏してもらいました。古い楽器のため音を鳴らしづらい部分もあるそうですが、100年前に演奏されたオーボエの音色は、感慨深いものがありました。

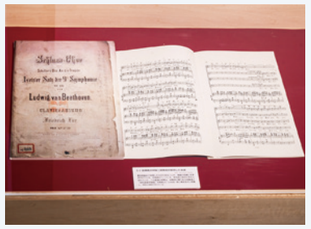
100年前の演奏で実際に使用されたオーボエは現在でも美しい音色を放った

九州大学「第九」日本人初演100周年記念事業

九大フィル史料展示

九州大学では、2024年6月10日から8月4日までの約2カ月間、伊都キャンパスのフジイギャラリーにて、九大フィル創立以来の貴重な楽譜や当時使用されていた楽器などを公開する特別展示を行いました。これに合わせて、6月12日には本学名誉教授の岡崎敦講師を迎え、ギャラリートークを開催。展示資料の解説や、当時使用されていた楽器の試奏などを通じて、一般の方々にも「第九」の歴史や魅力を紹介しました。この機会に、九大フィルの音楽活動の歩みとともに、楽譜や楽器の持つ歴史的価値を感じていただける貴重な展示となりました。

大正期のコントラファゴット



指揮者の榊保三郎教授が使用した楽譜（東京藝術大学図書館蔵）

100年前の「摂政宮殿下ご成婚奉祝音楽会」再演

第1部

●フェリックス・メンデルスゾーン
結婚行進曲「真夏の夜の夢」作品61より
●「新編奉祝歌（「第九」第4楽章の一部替歌）」再演

最初の曲目は100年前と同じ、メンデルスゾーンの「結婚行進曲」

本演奏会の第一部では100年前の演奏会のプログラムの一部を再現しました。最初の曲目は100年前と同じで、結婚式の音楽として有名なメンデルスゾーンの「結婚行進曲」。当時の皇太子（後の昭和天皇）の結婚を祝う奉祝音楽会にふさわしい華やかで明るい楽曲から始まりました。

再演前に、日本人初演の第九とオリジナルの第九の相違点を解説

「新編奉祝歌」は、本学の榊保三郎教授が第九の第4楽章の一部に奉祝歌の歌詞を当てはめて編曲したもので、オリジナルの第九とはいくつか異なる点があります。その相違点について、再演前に鈴木氏から解説がありました。

テノールの独唱をソプラノにし、終わりに聞こえない突飛な終わり方に

「新編奉祝歌」は第4楽章を全部演奏しているのではなく、トルコマーチと呼ばれる部分から突然始まります。オリジナルではテノールが独唱しますが、100年前の演奏ではソプラノに変更されており、本演奏会でも世界的に活躍されているソプラノの澤江衣里さんに独唱いただきました。また、突飛な終わり方をしている点も論議を呼ぶところのようです。

特別演奏会での「第九」の演奏は、九大フィルにとっても意義が大きい

本演奏会は、松村晶名誉教授が退官される前から「100周年にやろう」と企画していました。松村名誉教授の情熱があったからこそ実現できたと思っていますし、節目となる演奏会を素晴らしい環境で盛大にできたことを嬉しく思います。

100年前の楽曲の再現は第4楽章の替歌の部分が課題でした。当時のドイツの音楽に合わせて日本語の歌詞をいかに自然に届けるか苦心しました。演奏する学生も苦労したと思いますが、ベートーヴェンの第9番はいつ演奏しても感動のある普遍的なテーマを持った作品で、自然に音楽の作り方や歌の役割を学べるので九大フィルにとっても意義のある演奏だったと思います。

学生のオーケストラは毎年、メンバーが入れ替わるため、新陳代謝が速くノウハウが蓄積しづらい面があるのですが、九大フィルは先輩から後輩にしっかり受け継ぐべきことを受け継いでいます。何よりみんな音楽が好きなんですよね。これはとても大事なことです。ベートーヴェンやブラームスといった大作曲家の作品は、半年取り組んで飽きてしまうようなことはありません。まだ演奏していない曲がたくさんあると思いますので、これからもより多くの曲にチャレンジしてほしいと思います。

音楽はロジックで説得するものではなく、ふいに得も言われぬ心の動きをします。若い人たちには、クラシックに限らず、演奏会など生で音楽を聴く機会があったら、まず行ってみてほしいですね。

演奏後、控室にて本学石橋達朗総長と

指揮 鈴木（すずき） 優人（まさと）（本学客員教授）

鈴木教授について

第2部

「第九」全曲演奏

●ベートーヴェン 交響曲第9番 ニ短調 作品125

九大フィルと200人の合唱団で第九の全楽章を演奏

第九は完成当時から革新的な交響曲として知られていました。演奏時間が1時間を超える超大作であり、しかも、第4楽章から合唱が入ります。100人以上の人が参加する巨大な編成は前代未聞の革新的な試みだったそうです。

第2部ではその壮大な交響曲、第九の全楽章を演奏。鈴木優人氏の指揮の下、招聘された4名のソリスト、九大フィルの学生や市民からの公募で結成された約200人の合唱団によって、迫力のある演奏と歌唱が披露されました。

九州大学および九大フィルに新たな歴史を刻んだ特別演奏会

演奏後は、鳴り止まない拍手の中、スタンディングオベーションを送る観客の姿も見られました。プログラムの終了後、鈴木氏やソリストの皆さんに花束が贈呈され、特別演奏会は大盛況のうちに終了。九州大学および九大フィルに新たな歴史を刻むとともに、次の100年に向けた意義のあるものとなりました。

指 揮：鈴木 優人（本学客員教授）
独 唱：澤江 衣里 / ソプラノ　布施 奈緒子 / アルト
　　山本 耕平 /テノール　加藤 宏隆 / バス・バリトン
演 奏：九大フィルハーモニー・オーケストラ

特集2 高校生が研究の醍醐味を実感！

夢に近づく夏の理工系プログラムを直撃

QURIESプログラムは令和3年度に新設された女子高校生を対象にした理工系研究インターンシップ制度です。元理事・副学長である伊藤早苗氏（故人）のご遺族からの寄附事業として、女子高校生に研究活動の体験の場を提供し、若手理系女性研究者・技術者が多く輩出されるよう支援を行うことを目的とした活動を行っています。令和6年度の本プログラムは福岡県内の36名の女子高校生を本学に迎え実施されました。

WEBサイト

ワタシたちが取材しました！
窪田 瑛仁（工学部4年）
山田 顕次郎（工学部4年）
柴田 はるな（法学部2年）
多田 真展（芸術工学部2年）

2024年8月、福岡県内の女子高校生が九州大学を訪れ、5日間にわたって研究活動を行うQURIESプログラムが実施されました。本プログラムに参加して研究活動を行った高校生とメンターの教員に広報課学生スタッフが取材しました。

このプログラムに参加したきっかけは何ですか？

高木　このプログラムでは高校生のうちに大学の研究室を体験できるということで、他では絶対経験できないと思い参加しようと決めました。

平井　ぼんやりと医療に関わりたいという思いはあったのですが、具体的に自分の将来のビジョンをはっきりさせたいと思い参加しました。また、高校では理系の女子が少なく、今回のようなプログラムで他校の理系女子の方々と交流して切磋琢磨したいと思いました。

プログラムではどんな実験をしましたか？

高木　マイクロバブルを使ってゼラチンに穴を開けるという実験をしました。実験中はうまくいかないこともありましたが、思い通りにいかないことも実験の醍醐味と感じられて面白かったです。

平井　私はマイクロ流体デバイスという装置の中に液体を流し込んで小さな物体を仕分ける装置を作りました。さらにそれを使ってマイクロビーズを仕分ける実験をしました。

このプログラムを通して研究に対する印象が変わったことはありますか？

高木　参加前は機械工学ということで機械を操作するイメージでしたが、実際は本当に小さなミクロの世界のものを扱いました。自分が構想していることを実現するためには、さまざまな研究が行われているということを知りとても面白かったです。

平井　私は元々医療に興味があったのですが、このプログラムで扱ったマイクロ流体デバイスが血液の分離に応用できるなど、工学の視点から医療にアプローチできることに改めて気づきました。いろんな分野がつながりアプローチできることがあるのだと、これまでの自分の視野の狭さにも気づくことができました。

大学院生との交流はいかがでしたか？

高木　私の質問に対して10倍ぐらいの情報量を返してくださって、そこからどんどん別の論点にもつながっていったことがとても印象に残っています。実験でうまくいかないことがあったとき、大学院生の方はその原因まで追究しようとされていてすごく熱意を感じました。

平井　実験で使う機械を説明してもらうとき、結果だけでなくその過程で起こる反応も教えてもらいました。ただ機械を扱うだけでなく、原理や条件など全てを把握されていて詳しく勉強されている姿が印象に残っています。

高校生へのメッセージをお願いします。

高木　私と同じ高校3年生にとっては、受験勉強の時期に参加することに迷われる方もいらっしゃるかと思いますが、このような機会があるなら絶対に参加した方がいいと思います。受験勉強にやる気が出ない時も、今回のようなプログラムに参加して大学のことを知ることで、大学生活をより身近に感じることができて頑張れると思います。

平井　実際に大学院生とお話しする中で、大学生活のことや受験勉強のコツなど知りたいことを何でも熱心に教えてくださいました。高校で一生懸命頑張っていることが将来の大学生活につながるといいなというビジョンがすごく見えたので、このような機会があればぜひ参加した方がいいと思います。

福岡県立輝翔館中等教育学校 6年
平井 実祐（ひらい みゆう）さん

福岡県立嘉穂高等学校 3年
高木 恵（たかき めぐみ）さん

平井さんへメッセージ

工学府 修士2年
角村 勇真（かどむら ゆうま）さん

高校生には難解と思われる分野でしたが、平井さんは5日間という短期間で目に見える成果を上げてくれました！この経験を糧にさらなる挑戦を続けてください。

高木さんへメッセージ

工学府 修士1年
青艸 裕大（あおくさ ゆうだい）さん

高木さんの質問をする力と根気よく何でも楽しんで行う姿勢は見習いたいと思いました。今後、高木さんの興味がある分野でご自身の力を発揮していただきたいです。

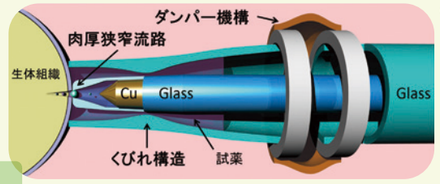
工学研究院 機械工学部門
山西 陽子（やまにし ようこ）教授

専門はマイクロナノ工学。微細な領域の工学的なアプローチによって、生きた細胞が有する未知なる機能の解明や細胞レベルの治癒のためのマイクロデバイスについての研究を行う。東北大学助教、名古屋大学、芝浦工大の准教授を経て2016年より現職。

まだまだ女性の研究者・技術者の割合が決して高いとはいえない理工系分野。本プログラムで研究を見守った先生に、プログラムに対する思い、中高生へのメッセージを伺いました。

高校に在学しながら、実際に大学の研究室に来て、実物に触れることができるといった機会が、昔に比べてどんどん増えてきたと思います。実物に触れる経験は将来を大きく変える可能性を秘めています。そういう機会はたくさんある方が良いという思いから、「ぜひやりましょう」という意気込みで今回のプログラムをやらせていただきました。

実物に触れることができる機会が増える一方で、現代社会はありとあらゆる情報で溢れ、日々刻々と価値観が変容していっています。自分にとって「何が重要なのか」を見極めるために、多方面にアンテナを張ることが大切です。インターネットだけでなく自分の足を使って調べて、一つの専門にこだわらずに貪欲に幅広く物事を知ろうとすることで、さまざまな価値観を身に付けていってほしいと思います。



山西先生の研究の一つである、針なし気泡注射器の構造。液体の中で電極先端（誘電体）に電界を集中させて気泡を発生させ、細胞にマイクロレベル（1/1000mm）の穴を開ける。気泡表面の付着力と気泡周りに発生する特異な流れ場を利用して、試薬を輸送することができる。

針なし注射器の外観。気泡の力で、試薬運送や植物の品種改良など生体組織への利用から、硬い金属の加工まで幅広い分野に応用が可能。

【略歴】
2003年 ロンドン大学インペリアルカレッジ博士課程修了
2004年 芝浦工業大学機械工学科特任講師
2008年 東北大学大学院工学研究科助教
2009年 JSTさきがけ専任研究員（ナノシステムと機能創発領域）
2011年 名古屋大学大学院工学研究科准教授
2013年 芝浦工業大学機械工学科准教授、JSTさきがけ兼任研究員（細胞機能の構成的な理解と制御領域）
2016年より 九州大学大学院工学研究院 機械工学部門 教授（流体医工学研）。ムーンショット目標1のプロジェクトマネージャー、CREST研究代表者等を務める。
専門はマイクロ流体システム、BIO-MEMS等の研究に従事。日本機械学会、化学とマイクロナノシステム研究会、IEEE等に所属

2024年7月7日(日)福岡市博物館で行われた▶
Kyushu U Connectイベントでの公演の様子

躍動

社会問題をミュージカルで

九州大学には120を超える数の公認団体がありますが、その中には長い歴史を持つ部活から近年新たに創設されたサークルまで存在します。今回ご紹介するのは、2024年度より新たに公認団体となった学生劇団「いと」~Italento~です。なかなか身近に考えてもらえない社会問題を自分ごととして捉えるきっかけづくりのために、ミュージカルという形で思いを届ける学生劇団「いと」~Italento~の活動や創設までの経緯を伺いました。

学生劇団「いと」~Italento~

学生スタッフが取材・執筆を担当する企画「躍動」。
タイトルは取材に協力した各団体の代表者が書いています。
個性あふれる手書き文字に、団体活動への熱意を感じます。

—発足から間もないItalentoさんですが、誕生までの経緯と活動目標を教えてください。

池田　学生劇団「いと」~Italento~では、社会問題をテーマとしたミュージカルを行っています。現在僕が二代目団長でして、当時、初代団長らが立ち上げる際にはさまざまな困難の中、やっと立ち上げられたと聞いてます。公演を一つ行うにも結構な費用がかかるので、まずはその経費を集めるためにクラウドファンディングをやり、ホームページやSNSも開設しました。他にも共創学部のKAPPA(共創学部学生企画助成金)を、2021年度と2022年度の2年間申請して採択されました。

活動目標として「社会問題を身近に考えてもらう」のと「つながりを創出する」というのがありまして、発足から3年が経った現在では16名の団員が在籍し、毎月何かしらの公演、もしくはワークショップなどのイベントを実施しています。公演ごとにチームを作り、脚本・演出・作曲・振付師・演者などの役割を決めて行います。僕はずっと演技をやっていたので演技指導に入ったり、逆に歌は素人なので前団長に教わったりします。自分ができることも、逆にできないことも、興味があればできる人に聞いてやってみようという形での役割分担なので、みんな2・3個兼任したりしてますね。

—池田さんの入部のきっかけを教えてください。

池田　僕は中三から高三までずっと演劇をしていて、入部のきっかけは単純に演劇を続けたかったからですね。特にミュージカルをしたいというわけではなかったのですが、演技に加え歌やダンスもできるという点に興味をひかれて入りました。

高校までやっていた演劇とミュージカルは全く毛色が違うものだったので、入ってからは演技の違いに難儀したのですが、今ではもうミュージカル大好き！ですね。

—なぜ社会問題をテーマとしたミュージカルを始めたのですか。

池田　順番としてはまず「社会問題の提示」があって、そのための手段としてミュージカルを選びました。社会問題って一般的に人ごとって捉えられてしまうことが多くて、どうにか自分ごととして捉えてもらえないかっ講習会や講演会のような堅苦しい雰囲気でなくミュージカルの形を使えば、世代を問わず、演劇を楽しみつつ、社会問題に触れるきっかけが作れるのではないかという理由で始めました。

演劇において「抽象劇」というのがあって、よく用いられる手法として、ある内容を直接的には取り扱っていないのに、そのストーリーを深く掘り下げていくと実はこういうテーマだったよ、というものがあるんですが、その点は他の劇団なども参考にしています。

—今年度新たに公認団体となりましたが、公認団体になっての変化はありましたか。

池田　自主公演のほかにいろんなイベントに参加させていただく機会が増えました。大学の広報イベントで15分程度の短い劇をやらせていただいたり、演劇以外にも小学生向けにワークショップを行ったりといった活動もしました。そういった機会を通じて学外の方々と知り合うことも増え、公演の依頼をいただけるようになりました。

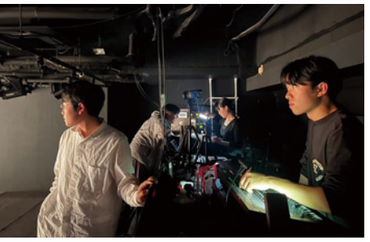
—今後の展望はありますか。

池田　目標の一つである「つながりの創出」を達成するための活動を増やしていきたいですね。団員間のつながりとしては、僕が団長になって1年半ぐらいなのですが、その期間にも共創学部以外の学部の団員が増えています。日本人学生と留学生がもっとつながることができるようなプログラム作りも考えていますが、既に留学生の団員もいます。今後も学部生・院生問わず、興味があるなら誰でもぜひおいでよ！って思ってますね。

また、外部とのつながりとして具体的には、外部の劇団、他大学や社会人劇団とコラボした公演などでありとあらゆる「つながりの創出」ですね！

—高校生へのメッセージをお願いします。

池田　私たち学生劇団「いと」~Italento~は、自分の才能を最大限に発揮できる劇団です。自分の好きなテーマで脚本を作ったり、演者として表舞台に立って大勢の人の前で演技をしたり、自分の好きな曲を作ったり、裏方として舞台の雰囲気を作るなど、ありとあらゆる役割があります。その中できっと自分に合った役割が見つかると思うので、ぜひ私たちと一緒にミュージカルを作り上げて、みんなが社会問題を考えるきっかけになるような活動をしていきましょう！



▲2024年5月4日(土)春公演でのリハーサル風景
演目:イット・メイ・ビー・リアル / Will Be Better

Data

◎団員：16名(2024年10月7日時点)
◎メンバーの学年：学部4年:7名、学部3年:7名、学部2年:1名、学部1年:1名
◎活動場所：課外活動施設Ⅱ·Ⅲ
◎活動日：毎週月·水曜日
◎問い合わせ先：
HP：https://www.italento-info.com/
Instagram：@musical.italento
X(旧Twitter)：@Italento0503

取材協力

団長
池田（いけだ） 幸多朗（こうたろう）さん
共創学部 3年

この記事は広報課学生スタッフが制作しました

島本 瑛生(工学部土木工学科4年)　若林 拓斗(理学部化学科4年)
長野 杏香(文学部人文学科1年)

留学生体験記

14歳での初来日をきっかけに日本に興味をもったドイツ人留学生に、
研究内容や九大芸術工学府の魅力などを語ってもらいました。

Henze Helenさん
（ヘンゼ・ヘレン）

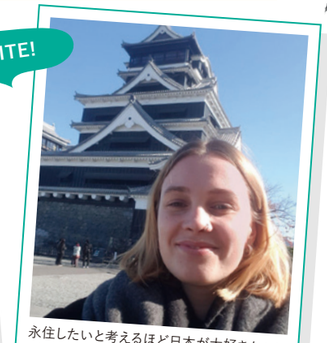
芸術工学府 芸術工学専攻 音響設計コース
修士課程2年

出身国：
ドイツ連邦共和国

バイオリンを習ったり、オペラハウスでアルバイトをしたりなど、子どもの頃から音楽に親しんできたヘンゼさん。ベルリン工科大学では音響学を学んでいました。

複数の研究室合同での旅行が毎年の恒例イベントで、2023年は熊本へ。阿蘇山の火口見学や温泉などを楽しんだ。

MY FAVORITE!



永住したいと考えるほど日本が大好きなヘンゼさん。九大への留学を機に九州各県へ旅行し、全県制覇まで残すは大分県のみになった。

世界から九大へ　九大から世界へ

KYUDAI GLOBAL STUDENTS

Q 日本への留学のきっかけは？

14歳の時に交換留学生として初めて日本に行きました。食事をはじめ何もかもがドイツとは大きく異なり、とても戸惑いましたが、違うからこそ興味をもちました。その後、旅行で日本へ行くたびに歴史や文化を学び、断片的な知識がつながることで、より日本に魅せられていきました。私にとって日本は学んでも学んでも新たな発見がある国です。いつかは日本で生活し、もっとこの国のことを深く知りたいと考えていました。

Q なぜ九州大学を選びましたか？

ドイツの大学では音響学を専攻していました。大学院でも音響を学びたかったのですが、日本で音響学が専攻できる大学は決して多くはありませんでした。九州大学には音響学の専攻があり、特に私が興味をもっているコンサートホールでの音響に関する研究が特徴的だったので、留学先に選びました。

Q 現在の研究内容をご紹介ください。

屋外コンサートの音響分析が私の研究テーマです。屋内のコンサートホール、屋外でのコンサートといった異なる環境で録音を行い、到来方向や音の強さといった音響パラメーターが聴いている人の感覚にどのような影響を及ぼすかについて主観評価実験より分析。音響環境を科学的側面、心理的側面の双方から研究しています。

Q 九州大学で研究することの魅力は？

大橋キャンパスの「音響特殊棟」にあるマイクやスピーカーなどの設備は非常に充実したものです。そのため、やりたい実験を支障なく進めることができています。また、研究室が比較的小規模なので、教授から頻繁にアドバイスを受けられることにも助けられています。専門領域の異なる先生から、研究に関して違った角度から意見をもらえて参考になります。

Q 留学して感じる福岡の印象は？

アジア人観光客の多さから、アジア大陸に近いことを実感します。東京よりも人が少なく、都市がコンパクトなので暮らしやすいです。芸術工学府のある大橋キャンパスは福岡市内にあり、どこへ行くのにも自転車で事足りるので便利ですね。

Q 留学後のビジョンは？

横浜にある電子計測機メーカーに就職が決まりました。吸音音響センサーやデータ収集・解析システムなどの研究に使われる計測器を手掛けている企業なので、九州大学で学んだ知識を、研究開発の世界で役立てたいと考えています。

アルバイト先の友人と一緒に宮崎県を訪れた際の一枚。自然の中にある青島神社の美しさが印象に残っているそうだ。

世界のキャンパス

海外留学を体験した九大生に、留学先で
どんなことを学び、どんな暮らしをしていたのか語ってもらいました。

岡﨑 大知さん
（おかざき だいち）
文学部4年

留学国：アメリカ
留学先：北アリゾナ大学
期　間：2023年1月～12月

ネイティブアメリカンの地で多様性を学ぶ

人種・文化の坩堝であるアメリカで文化人類学を学びたいと思い、北アリゾナ大学への留学を決めました。北アリゾナ大学には先住民族であるナバホ族出身の学生を始めさまざまな文化的背景を持った学生が在籍しており、そのような環境で学べることも魅力の一つでした。

-休日の過ごし方、留学して良かったこと

大学は自然に囲まれており、グランドキャニオンなどの雄大な景色をよく見に行きました。また長期休みにはAmtrakで都市部など遠方へ行くこともありました。留学してよかったことは、日本ではできないことに挑戦できたことです。移民問題の授業でメキシコとの国境へ行き3泊4日のフィールドワークを行ったり、日本文化を現地学生に広めるイベントを主催したりなど、さまざまな挑戦ができました。

-留学経験をどのように活かしていきたいか

物事を多角的に捉えたいと思います。アメリカでは肌の色、話す言葉、移民か否かなど、さまざまな基準で多くの人が対立したり共存したりしています。その様子を留学生として一歩離れた立場から見たことで、それぞれの世界を見ることができました。この経験を活かし、善か悪か、自分と同か異かという尺度を超えた部分に目を向けたいと思います。

-留学を考えている人へメッセージ！

留学期間は長いようで短く、できることは限られています。「何かをやってみたいけど迷う」ということもあるかと思いますが、迷うというのはやりたい気持ちがある何よりの証拠です。自分の関心のあることにはとにかく挑戦してみましょう！

留学先の町、フラッグスタッフは世界で最初にInternational Dark Sky Cityとして認定されたことで有名で、標高2000mから見上げる星空は息をのむほどの絶景でした。

ハンバーガーにポテト、ソーダというのがポピュラーな食事の組み合わせです。ハンバーガー店は至る所にあり、いろいろなハンバーガーやポテトを食べ比べるうちに自分の好みが分かってきます。

大学から車で1時間半のグランドキャニオンでは、見渡す限りどこまでも景色が続いていて地球の大きさを実感できます。

留学生のごはん事情

大学にはファストフード店やブッフェ形式の食堂がありましたが、私は出費を抑えるためによく自炊していました。写真はブッフェ形式の食堂の様子で、1回11～15ドル（1570～2000円）です。

北アリゾナ大学

1899年創立。学士・修士・博士課程、オンラインプログラムにおいて、経営学、自然科学、工学、教育学など100以上の専攻分野を誇る総合大学。キャンパスはアリゾナ州北部の山岳地帯に位置する町Flagstaff（フラッグスタッフ）にあり、年間を通して300日近くが快晴という穏やかな気候が特徴。雄大な自然に囲まれた環境で2万人以上の学生が学び、約80か国・地域から1,400人を超える留学生が集う。

留学情報はこちら！
https://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/study

日本文化を現地の人に楽しんでもらいたいという思いから、日本人留学生、現地の学生を数名ずつ集めて2カ月以上準備をし、イベントを開催しました。イベントには200人以上の現地の学生が参加し、大盛況を収めました！

新たな技術に触れる喜びを忘れずにいたい

留学時に観戦したアリゾナ・ダイヤモンドバックスの試合。学生時代から野球が好きで、現在も友人と楽しんでいるそう

工学部電気情報工学科 2019年卒業
システム情報科学府 情報知能工学専攻
2021年修了
ソフトバンク株式会社

髙橋 遼（たかはし りょう）

—どのような大学生活を過ごされていましたか？

髙橋　留学生との交流サークルに入ったことで刺激を受け、大学3年時にアメリカのアリゾナ州立大学に留学しました。また、国際化学生委員会（SCIKyu）の委員長を務めて、留学生向けのクラブガイドブックを作成するなど、大学の国際化を推進する活動に取り組んでいました。

—大学ではどのような研究をされていたのですか？

髙橋　大学院では、W-i-F-iの届き方の変化を使ってイノシシの位置を探るセンシングの研究をしていました。企業との共同研究でイノシシから農作物を守ることが目的です。この研究では機械学習を活用しており、また、学部生の頃にはディープラーニングに触れる機会もありました。

—現在はどのような仕事をされているのですか？

髙橋　画像系AIの研究開発を担当しています。特定のプロダクトを開発する場合は技術が限定されがちですが、今取り組んでいるのは未来に向けた研究なので縛りがありません。そのため、常に最新のテクノロジーをキャッチアップできることが楽しいです。大学で経験した機械学習やディープラーニングを活用する機会も多くあります。

—九州大学で学んで良かったと感じることはありますか？

髙橋　大学院で私が所属した荒川豊教授のヒューマノフィリックシステム研究室では、理論を学ぶだけではなく実装の場が豊富にあり最新技術に触れながら、やりたい研究に伸び伸びと没頭できる環境でした。忙しくはありましたが、自然豊かな伊都キャンパス周辺の環境のおかげで心にゆとりが持てたことも九州大学ならではの魅力です。

—これからの目標を教えてください。

髙橋　今研究している分野で成果を出すことが当面の目標です。製品化や特許取得、論文発表など何らかの形で発信し、社会に貢献したいと考えています。いずれはエンジニアからマネジャーへと立場が変わるかもしれませんが、自分で手を動かし、未知のテクノロジーに触れることで喜びを見出す姿勢はいつまでも貫いていきたいです。

—九州大学を目指す受験生や在校生にメッセージをお願いします。

髙橋　大学では同じ分野を学ぶ仲間に囲まれていますが、社会に出るといろんな分野で学んできた人が、それぞれの専門性を発揮しています。その専門性の深さが社内におけるアイデンティティーになるので、好きな研究に邁進して、とことん専門性を尖らせてほしいと思います。

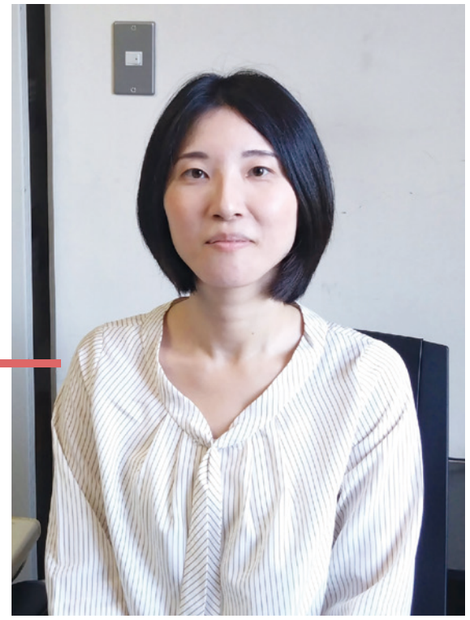
イベント「ナマステ福岡」にて。九州大学在学中は、異文化交流・国際交流にも力を入れていた

今回のインタビューでは研究室の先輩を取材させていただきました。主に卒業までの活動、お仕事の内容、九大生へのメッセージなどについてお聞かせいただきましたが、私とは全く違う角度の活動を主にされていて、とても勉強になることが多かったです。これからもたくさんのご活躍をお祈りしています！

聞き手 | **藤本 隆晟**（ふじもと りゅうせい）　システム情報科学府 情報理工学専攻 修士2年

研究者として自分が信じる道を貫いていく

卒業後は九大フィルOBが立ち上げた社会人オーケストラ「管弦楽団紬（つむぎ）」に参加。写真は演奏会の様子



教育学部 2010年卒業
人間環境学府 教育システム専攻
博士後期課程 2017年単位取得退学

熊本学園大学
経済学部 准教授

宮川 幸奈（みやがわ ゆきな）

—大学ではどのような研究をされていたのですか？

宮川　教育学部で教育哲学を専攻し、卒業論文では、子どもが成人へと成長するにあたり、「責任ある存在になるとはどういうことなのか」を研究しました。その後、大学院へと進学し、教育学の博士号を取得。博士論文では、学部生時代の研究テーマだった「責任」から派生して「自律を目指す教育」について発表しました。

—大学生活での思い出を教えてください。

宮川　よく九大フィルハーモニー・オーケストラでフルートを吹いていました。学部生時代はほぼ毎日顔を出し、楽器を吹いたり、友人と他愛のない話をしたりするのが楽しかったです。私が団員だった時に、九大フィルが創立100周年を迎え、記念演奏会の準備に奔走したのも良い思い出です。

—現在はどのような仕事をされているのですか？

宮川　教育哲学の領域で募集していた熊本学園大学の准教授として、中学・高校の教員免許取得を目指す学生に、教育原理や道徳教育の理論・方法などを講義しています。教育哲学の専門的な内容を扱うものではありませんが、講義の中にこれまでの研究で得たエッセンスを入れ、私ならではの講義になるような構成を意識しています。

—これからの目標を教えてください。

宮川　研究者はこれをやればうまくいくという正解がある仕事ではありません。だからこそ、迷ったときには安易な道を選ぶのではなく、自分が追究したいテーマを貫き、自分自身が面白いと感じる論文を、これからも書き続けていきたいです。

—九州大学で学んで良かったと感じることはありますか？

宮川　九州大学はとても大きな大学ですが、教育学部は他の学部に比べると学生が少人数です。その一方で先生の数が多いことが魅力です。そのため、先生方から丁寧なサポートを受けることができました。院生時代に研究を深めるためのアプローチ方法を迷っていた際も、先生方の指導やアドバイスを受けて道を見つけることができました。

—九州大学を目指す受験生や在校生にメッセージをお願いします。

宮川　九大の教育学部は教員養成を専門とする学部ではないため、研究テーマや卒業後のキャリアがいろんな方向に広がっています。私自身、研究の先が見えずにつらい時期もありましたが、その時に考え抜いたからこそ、今、納得して研究を続けられています。入学後に時間をかけて自分が進む道を決めていけるので、たくさん悩んで、試行錯誤する経験を大切にしてほしいと思います。

休日は県内を散策したり、ちゃんぽんを食べ歩いたりと熊本を満喫している

教育哲学の研究者として活躍されている先輩の、現在に至る経緯や今後の展望を伺うことができ、私自身もどのような選択をして生きていくか考えるきっかけになりました。迷ってきた経験を土台として「やってみたい」と思えることを大切にされている宮川さんのように、私も『挑戦を楽しむ人間』として教育現場に携わり続けたいと思います。

聞き手 | **増木 風佳**（ますき ふうか）　人間環境学府 教育システム専攻 博士後期課程2年

田中さんと内田先生は競技者、スタッフとして共に東京2020大会に参加した

クローズアップ九大 Close Up! 九大

パラスポーツを通した
共生社会の成熟に貢献

パラアスリートも学ぶ「人」に眼差しを向けた研究室

Profile
内田（うちだ） 若希（わかき） 先生

栃木県出身。早稲田大学卒業後、九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻修士・博士課程修了。2020年10月より九州大学人間環境学研究院人間科学部門准教授を務める。

障害者の内面や、その周辺環境を心理学的アプローチによって研究する

人間環境学研究院の内田若希准教授は障害者や障害者を取り巻く社会について、心理学や障害学の視点から研究を行っています。現在の主な研究テーマは「パラスポーツを通した共生社会の成熟」についてです。また、内田先生には「日本パラリンピック委員会強化本部 情報・科学部会領域スタッフ（心理）」としての顔もあります。パラリンピック開催地に赴き、大学での研究と、現場での実践を並行しながら精力的に活動しています。

内田先生は健康・スポーツ科学講座で運動心理学などの講義を受け持っている

目の前にいる対象者に寄り添う”血の通った!!研究を大切にする

研究室では5名の社会人が学んでおり、パラテコンドー日本代表として東京2020パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）、パリ2024パラリンピック競技大会（以下、パリ2024大会）に出場した田中光哉さんも、その一人です。「うちの研究室はなんでもOKなんで、研究テーマはバラバラですよ」と内田先生が語る通り、研究する題材は必ずしもパラアスリートの領域に限ったものではありません。インタビュー調査を主体にした質的アプローチ、量的データを収集・分析する量的アプローチなど、用いる研究手法も人によって異なります。「共通点を挙げるとすれば、『人間に眼差しを向けた研究』でしょうか」と内田先生。「論文を書くためだけの研究に終始するのではなく、自分の研究によって目の前にいる研究対象者が、少しでもより良く生きられるためにはどうすればいいかを考えています」。

2023年の杭州2022アジアパラ競技大会では2位の成績を収めた　写真：伊藤力

Profile
田中（たなか） 光哉（みつや）さん

1992年、福岡県生まれ。九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻健康・スポーツ科学コース修士3年。2017年よりパラテコンドーを始め、東京2020大会（9位）、パリ2024大会（7位）と、2大会連続でパラリンピックに出場。

九州大学総合研究博物館［ミュージアムレポート］

Museum Report vol.32

Kyushu University Museum

箱崎だより（最終回）

～「ミュージアムDX」シリーズ予告～

九州大学 総合研究博物館 副館長
三島 美佐子

①活動風景

移転完了後、旧箱崎キャンパスの存在を思い出してほしくて始めた「箱崎だより」シリーズ。この3年間で当館の開示室紹介も一巡しました。そこで次回からは近年ホットな「ミュージアムDX」シリーズをお届けします。

ミュージアム業界では世界的に、2000年代前半から標本・資料のデジタルデータ共有が本格化し始めました。従来の写真画像データに加え、近年は3D（三次元）データも組み込まれつつあります。ちなみに当館が標本の3D化に取り組み始めたのは2010年頃からになります。当時、VR（仮想現実）がご専門の竹田仰先生（現芸術工学研究院名誉教授）が館長に就任されたこともあり、3Dスキャンした当館所蔵動物骨格標本をもとにVRアプリを作成し、学童保育の小学生に協力してもらい、使用感や学習効果の測定を試みました。

また当館は2021年度から文化庁の「博物館機能強化推進事業」に採択され、まちと当館をつなぐ活動や、市民とともにまちの記憶・記録をデジタルアーカイブする取り組みを行っています。昨年度は共創協学する市民の主体となる「まちの学芸員」も発足しました。その中で、箱崎のまちを探索し地域の文化資源や緑を画像データで共有したり、スマホアプリを用いた植栽樹の3Dスキャニングなどを試みたりしています（①）。

また昨年度の採択事業では、3Dデータの活用や樹木アーカイブの可能性を探りました。これには、汚染土洗浄工事などの都合で昨年2月に伐採されたヒマラヤスギ大木の3Dデータを用いました。このヒマラヤスギは旧工学部本館のすぐ脇に植栽されていた樹齢約100年のもので、伐採前に人間環境学研究院の小川拓郎先生に3D計測していただいていたものです（②）。XR（交差現実）アプリ開発ベンチャーの株式会社ホロラボとの協働で、建築パースのような実務やゲームのようなホビーなどに使用できるモデル化を行い、その過程で新たな点群抽出技術も生み出されました（③）。

当館は「実物資料の力に勝るものはない」と強く考えています。同時に、デジタル化とその活用が新たな発見や学びを促しつつ、実物の重要性をさらに引き立てる事を実感しています。それでは次回からの「ミュージアムDX」シリーズも、どうぞお楽しみに！

②3Dデータ化されたヒマラヤスギ

③株式会社ホロラボによる技術紹介

文化庁「博物館機能強化推進事業Innovate MUSEUM事業」に採択された「地域共創協学デジタル化事業」の詳細はこちら↓
URL：https://www.museum.kyushu-u.ac.jp/information/bunkacho.html

パラスポーツの研究を通して2人が考えていること

東京と福岡を行き来しながら パラリンピアンと大学院生を両立

内田　田中さんとは2021年にメールをもらったのが最初の接点ですよね。

田中　そうですね。パリ2024大会を目指しつつ、その後のキャリアを考えて大学院で学びたいと考え、関心のある研究をされていた内田先生にメールしました。

内田　パリ2024大会を目指すと聞いていたので、研究室に入りたいと聞いた時には実は迷いました。正直、研究とアスリートの両立は厳しいと思っていたので。

田中　日本代表の合宿を抜けて授業に参加したり、授業内での発表や研究会での発表の時期をずらしてもらったり、皆さんに理解してもらったおかげで何とかやってこられました。

内田　大会前は減量もあってきついはずなのに、「合宿があるのでお先に失礼します」と颯爽と帰っていく姿を見て、アスリートの体力はすごいと驚かされました。

お互いの研究テーマに刺激を受けつつ パラアスリートに眼差しを向ける

田中　障害のあるアスリートの内面を丁寧にひもとく内田先生の研究は、「パラアスリートへ転向するアスリートの障害者アイデンティティーの変容」という私の研究に近い面が多くて参考になります。

内田　実は私も同じ気持ちです。私の研究室は研究テーマがみんな違うので、私の研究にここまで近いテーマを選んだ大学院生は田中さんが初めてでした。田中さんのアイデアを聞いていると、「まだそこに研究の余地があったか！」と、はっとさせられることがあって刺激を受けています。田中さんには「博士課程に行った方がいいよ」と勧めているところです。

田中　パリ2024大会が終わって一段落しました。先のことは決めていませんが、まずは修士論文を完成させないとですね。

「障害に負けずに頑張る人はすごい」その陰に隠れた存在を見逃さない

内田　パラリンピックを通じてパラスポーツやパラアスリートについて知ってもらえること自体は、とても喜ばしいことだと思っています。ただその一方で、何らかの支援を必要とされている重度障害者の存在が置き去りにされています。「障害があっても頑張っているからすごい」という風潮にも違和感があって、障害者は必ず頑張らなければいけないのでしょうか。パラアスリートの立場から田中さんはどう思いますか？

田中　確かにパラスポーツをやりたくてもやれない障害のある方はたくさんいます。パラアスリートがメディアに取り上げられることで、生きづらくなっている方がいることを認識しなければいけないと考えるようになりました。

内田　現在取り組んでいる「パラスポーツを通した共生社会の成熟」という研究テーマも、そもそも共生社会とは何かという疑問をもったことがきっかけです。障害者に対してポジティブな意見だけではなく、ネガティブな意見もあるのは自然なことです。好きな人、嫌いな人、頑張っている人、頑張れない人、頑張りたくない人、いろんな人がいる中で、その違いを受け入れられずとも、排除せずに同じ空間にいられることが真の共生社会だと私は思います。でも、そんな社会をつくるにはどうすればいいのだろうと、考えが堂々巡りしているところです。

田中　難しいですよね。私も自分が頑張ることで社会に何かしら良い影響を与えたいと思っていますが、パラアスリートとして何を発信すべきなのかは、ずっと考えつつも完全な答えが出せずにいます。

内田　心理学の領域を超えた研究になっていますが、「共生社会とは？」という難問にこれからも向き合い続けます。

パリ2024大会の惜敗をバネに 4年後のロス大会を目指して始動

大学卒業後にパラスポーツの支援団体に入職した田中さん。「私は高校まで健常者と一緒にサッカーをやっていましたが、多くの障害者はスポーツがやりたくてもやれない環境にあることを知ってショックを受けました」と、当時を振り返ります。パラスポーツを支援する活動の中で、自身がパラアスリートとして経験を積むことの必要性を感じ、パラテコンドーを始めたのが2017年のこと。出場することが目標だった東京2020大会を経て、2大会連続出場となったパリ2024大会ではパラリンピック初勝利を挙げました。「1勝2敗という成績でしたが、負けた2試合も手応えを感じる内容でした。パリ2024大会は有観客だったので、歓声や熱気を感じられたことも良かったです。パラリンピックならではの雰囲気をもう一度味わいたいですね」と、田中さんの視線は既に2028年のロサンゼルス2028大会に向かっています。

東京2020大会後の3年間で国内外23もの大会に出場。練習や大会で多忙を極める中でも伊都キャンパスに通い、授業や研究にいそしんできた

パリ2024大会ではラウンド16に勝利しつつも、準々決勝、敗者復活戦ともに1点差の惜敗
写真提供：田中光哉

大学院での研究と競技経験を生かして パラスポーツの普及に貢献したい

田中さんが内田研究室に進学したのは、アスリート活動を終えた後のキャリアを見据えてのことです。「心理的な側面からパラアスリートの内面を探る研究と競技者としての経験、それぞれで得た学びや視点を生かして、パラアスリートを多面的に理解できるようになりたいです。将来はパラアスリートの育成やパラスポーツの普及に関わりたいと考えています」。

さまざまな縁に導かれた現場経験で 多様なカテゴリーの障害者と触れ合う

「現場に課題が落ちているから、まず行ってみるといいよ」。大学で心理学の講師から言われたこの言葉が、今もなお内田先生を突き動かす根底にあります。「車いすラグビーチームのボランティアから始まって、障がい者スポーツセンター、日本パラリンピック委員会、いろんな縁に恵まれながら障害者と現場で触れ合い続けてきました。現場で自分が何を感じたかが、研究テーマを決める際の道しるべです」。内田先生にとって研究は、研究室の中だけで完結するものではなく、現場での実践活動があってこそ。「パラスポーツの草の根的な活動も、トップアスリートが集まるパラリンピックも現場で見てきました。それぞれの現場で拾い集めた課題をつなぎ合わせて、今の私の研究があるのだと思います」と現場主義へのこだわりを語っています。

内田先生と同領域を研究するイギリス・ダラム大学のブレット・スミス教授（中央）、共に日本パラリンピック委員会で活動する日本大学の橋口泰一准教授（左）は本学の博士課程に在籍

迷った時はわくわくする方へ 無駄なことをたくさんしてほしい

九大生に向けて内田先生は「迷った時にはわくわくする道を選んでほしい」とアドバイスを送ります。「授業や実習でみんな大変だと思います。限られた時間の中で膨大な情報を取捨選択せねばならない時代ですが、何かをやる、やらないの判断をする際に、最近よく言われる”ダイパ“だけを考えてほしくはないですね。面倒でも面白そうだなと少しでも感じたらやってみてほしい。その時は無駄だったと感じるかもしれませんが、そんな無駄の中に人生を変える出会いがあるかもしれませんよ」。ちなみに内田先生は、大学在学中に学ぶことの意味を見失い、退学しようと考えていたそうです。そんな時に偶然受けた授業が、パラスポーツに研究者として関わる原点になったと自身の体験を語ってくれました。

2014年にパラスポーツの研究をけん引するイギリス・ラフバラー大学を視察した際、当時在籍していた先生方とディナーを共にした際の1枚

海外の日本人同窓会特集

インドネシア同窓会

九州大学インドネシア同窓会は、現地駐在員を中心に、約20年にわたって九州大学同窓生の絆を深めてきました。現在の活動の様子を紹介します。

KYUDAI NOWでの同窓生の集合写真（2024年）

懇親会の様子～インドネシア伝統のパティックを着用して～（2024年）

世代や職業を超えて、インドネシアで結ぶ九大の絆

同窓会はリラックスして語り合える貴重な場所

―設立の経緯をお聞かせください。

木村　2004年の頃、毎年開催されていたインドネシアの九州人会で九大の後輩に出会い、「九大の仲間を集めてみよう」という話が持ち上がったことがきっかけです。最初は4人でスタートしましたが、口コミや地元紙の広告で募ったところすぐに10名以上のメンバーが集まりました。

岡田　現在は38名の会員がいます。駐在員が中心ですが、九大で医療を学びインドネシアで医療に従事している人や、元留学生のインドネシア人もいます。年代や職業はさまざまです。

―現在の活動をお聞かせください。

岡田　年に2回のゴルフコンペと2～3カ月に1回のペースで懇親会を開催しています。インドネシアに九大の先生や学生の皆さんが来られた際には、懇親会を開いて、現地サポートも行っています。

―同窓会は会員の皆さんにとってどのような存在なのでしょうか。

岡田　仕事とは異なるコミュニティで、九州大学という共通のバックグラウンドを持つ仲間と、九大時代の思い出や日本の近況についてリラックスして語り合える貴重な場です。

木村　世代や職業の違いを超えて和気あいあいと交流を楽しんでいますよ。

―今後の展望をお聞かせください。

岡田　2023年に九州大学同窓会連合会に加盟したことで九大との交流がさらに強化されました。今後も九大との連携を深め、ビジネスや教育の分野でも同窓会の価値を発揮できればと思っています。インドネシアの若者が九大に留学する橋渡しをしたり、優秀なインドネシア人を採用したいという企業に九大の留学生を紹介したり、双方にメリットをもたらす取り組みを進めたいですね。海外にいるからこそできることがあると思っています。

七帝戦ゴルフでの集合写真（2023年）

―最後に会長からメッセージをお願いします。

木村　若い人にはぜひ、海外に目を向けてほしいと思います。文化や習慣、国の制度が違いますから、世界が何倍も広がります。また、高い見識と実践力を身につけて日本の発展にも寄与してほしいですね。

お話を伺ったのは…
KOBELCO TRADING INDONESIA
岡田 朋之（おかだ ともゆき）さん
法学部 2013年卒業

お話を伺ったのは…
インドネシア同窓会会長
木村 博（きむら ひろし）さん
経済学部 1983年卒業

インドネシア同窓会への参加を希望される方はこちらのメールにてお気軽にお問い合わせください。
連絡先 はこちら atsushi.oya727@gmail.com
※インドネシア同窓会の会員情報は、2024年10月現在のものです。

タイ同窓会（ガオ会）

九州大学タイ同窓会（通称、ガオ会）は、約30年の歴史をもち、企業の駐在員を中心とした同窓生で構成されています。その活動の様子を伺いました。

左から、ガオ会の岡本会長、九州大学の清水副理事、タイ同窓会（タイ人同窓生が中心）のSurin会長

懇親会での集合写真（2024年）

約30年の歴史を持つ「ガオ会」タイ赴任中のサードプレイス

本格的に大学との交流が始まり会の認知や役割も拡大

―設立のきっかけを教えてください。

岡本　1993年頃に、商社鉄鋼部門のバンコク駐在員を中心に、九大出身者が集まって懇親会を始めたのがきっかけと聞いています。設立時にタイ語で「九」を意味する「ガオ」の文字をとってガオ会と名付けました。

西田　当時は今と違って日本の情報が手に入りにくかったため、貴重な情報交換の場になっていたようです。現在の会員数は31名。駐在員が中心なので男性が多いのですが、女性会員も5名在籍されています。卒業生の他、過去に九大の教職員だった方も登録されています。

―現在の活動をお聞かせください。

岡本　主な活動は、懇親会やゴルフの「七帝戦」、「七帝早慶対抗戦」への参加などです。2023年に九州大学同窓会連合会に加盟してから、本格的に大学との交流が始まり、九大総長がタイを訪問されたときや、教授が学生を連れてフィールドワークに来られたときにも懇親会を開いています。

―最近は、「KYUDAI NOW」にも参加されているそうですね。

岡本　2023年から参加するようになりました。講演会と懇親会の2部制で毎年盛り上がっています。大学や政府機関関係者の多いタイ人同窓生との交流が深まっています。

西田　タイ人同窓生の方にお話を伺うと、さまざまな場所でご活躍されていて、中には業務連携につながりそうな出会いもありました。ここでのご縁を大事にしたいと考えています。

KYUDAI NOWでの集合写真（2023年）

―今後の展望をお聞かせください。

岡本　タイ人同窓会との連携を密にして、同窓生がさまざまな分野で活躍できるようになればと思っています。九大は総合大学なので勤めている会社の業態も幅広い。そこをうまくマッチングしてビジネスに人脈や交流が広がれば良いですね。

―最後にメッセージをお願いします。

岡本　最近の若い人は安定志向が強いようですが、ぜひ海外に出て視野を広げ、自分が輝ける得意分野を見つけてほしいです。日本とタイの若い世代の交流を期待しています。

西田　今は情報を得る手段がいろいろありますが、現地に行かないとわからないこともあります。一歩、日本の外に出てその経験を人生の糧にしてください。

お話を伺ったのは…
福岡県 バンコク事務所
西田 光孝（にしだ みつたか）さん
法学部 2004年卒業

お話を伺ったのは…
タイ同窓会（ガオ会）会長
岡本 秀則（おかもと ひでのり）さん
工修応 1979年修了

タイ同窓会への参加を希望される方はこちらのメールにてお気軽にお問い合わせください。
連絡先 はこちら 9gaokai@gmail.com
※タイ同窓会の会員情報は、2024年9月現在のものです。

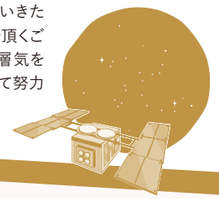
令和6年度 山川賞受賞者のみなさんをご紹介します！

宇宙の謎を解明する宇宙探査機の開発に携わるために

工学部 2年
菊地（きくち） 祥弘（よしひろ）

私の夢は太陽系の惑星やその衛星の起源を探る宇宙探査機の開発に携わることです。小学生のころにペルセウス座流星群を見て宇宙に魅せられ、その憧れはどんどん大きくなっていき、いつしか自分も神秘的な宇宙の謎を解き明かしたいと思うようになりました。

現在私は宇宙開発体験サークルPLANET-Qに所属し、ハイブリッドロケットや小型二輪ローバー型CanSatの開発に携わっています。講義を通して宇宙工学の知識をつけた上で、今後は大学院留学に挑戦するなど、将来必要となる国際性と専門性を高めていきたいと考えています。山川賞で頂くご支援を有効活用し、より一層気を引き締めて夢の実現に向けて努力を続けていきます！



地雷退治ハ俺ニ任セロ!!!!

軍人や民間人、大人や子供を問わず、無差別に命を奪う地雷は、地球上に無数に埋まっています。そして、今この瞬間もどこかで誰かがその被害を受けています。地雷のない世界を実現できるのか、その答えを知る者はいません。現状ではほとんど不可能に近いのが実情でしょう。一人の人間が数十年の間に成し遂げられることには限りがあります。

それでも、人類史上最も“天才的な”発明品とも言える地雷に対して、できることをやろうと思います。まずは、テクノロジーを駆使して、テキを見つけ出すことから始めたいと思います。

理学部 2年
西村（にしむら） 齊明（なりあき）

持続可能な国際協力の仕組みづくりを目指して

私の将来の目標は、持続可能な国際協力の仕組みづくりを行うことです。私は高校、大学の先輩である中村哲医師をきっかけに国際協力に興味をもつようになり、彼のように現地の人々の将来まで見据えた支援がある一方で、支援する側の利益が先行し、むしろ現地の妨げになっているものもあるということを知りました。そこで、各国際支援団体の活動内容を評価、可視化し、より持続的な活動をしている団体が活発に事業を進められるような仕組みの構築を目指します。

今後は頂いたご支援で、自分の成長につながる経験をたくさん積みつつ、海外留学や大学院進学を通じて専門性を深めていきます。そして誰もが自立した生活を送ることのできる社会を実現します。

共創学部 2年
邊見（へんみ） 紗来（さら）

日本の森林を世界の最先端に
―森林を技術によって改革する―

農学部 2年
弓場元（ゆばもと） 悠人（ゆうと）

私の将来の夢は、VRなどの技術が内包されているXR技術や昨今話題のAIといった先端技術を上手く取り入れながらデジタル化していくことで、最先端の森林管理を実現することです。

夢を実現させ、日本に潤沢にある「森林」という資源を次の世代やその次の世代へと継承し守っていくには、単なるデジタル化ではなく、「持続可能」もキーワードになってくるため、頂いたご支援を活用しながら今まで以上にアンテナを広げて活動を行っていきたいと思っております！

デザイン思考による日進月歩の医療イノベーションを目指して

医学部 2年
石田（いしだ） 廉（れん）

私が高校生の頃から抱いている理想の医師像は、単に患者さんの病気を治すだけでなく患者さんの隠された本心をくみ取り、そのライフスタイルに適した治療方針を立てられる医師です。この目標を達成するため、私はビジネスの世界で主流となっているデザイン思考に着目しました。デザイン思考をQRECやi.schoolなどの学びを通して学生時代に習得し、将来、医療現場で活かしていければと考えています。医学とデザイン思考の両輪を回す医師として活躍するためにも、日々研さんを積んでいきます。

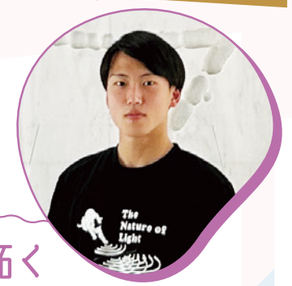
歴史と自然に揺られる太平洋島嶼地域と紐解く、記録する、未来を紡ぐ

私は太平洋島嶼地域をフィールドに後世に島を残すための研究・実務に取り組んでいます。これまでマーシャル諸島やミクロネシア、フィジーといった国に渡航し、歴史的には核実験や太平洋戦争に翻弄され、近年は海面上昇や外来生物によって変容を余儀なくされている現状を目の当たりにしました。そこで島に帰属するアイデンティティーを次の世代につなぎたいと考え、現在、島そのものと島の暮らしを科学的に理解する知見・スキルの獲得に励んでいます。

今後は交換留学や海外大学院進学、フィールドでの研究活動により、太平洋島嶼地域のすべての変容を学術的な裏付けとともに記録し広く伝承できる人材を目指します。

共創学部 3年 福寺（ふくてら） 航大（こうた）

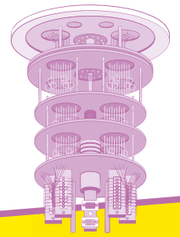
物理で未来を拓く
～量子コンピュータからのアプローチ～



理学部 3年
林田（はやしだ） 泰造（たいぞう）

私は物理学科国際理学コースに入学後、初めて大学の物理に触れた際に、全てが未知で溢れており、理解したい・おもしろいと感じました。物理の勉強に没頭していくうちに夢中となり、図書館やゼミ、上級生の講義にも足しげく通うようになりました。現在は、学内外において「量子ビットを安定に実現できる物理系の探索」を目標に、研究活動に取り組んでいます。

来年からは、山川賞の支援を受けて、英国ケンブリッジ大学で1年間の研究留学に挑戦する予定です。留学先では、研究における議論や共同する力を磨きたいと考えています。高騰する留学費用を準備できたのは、九州大学基金の支援者の方々のおかげです。心より感謝申し上げます。



化学に潜む「普遍性」を求めて

「化学」とは「物質の構造・性質・反応を原子レベルで理解する学問」です。その対象はフラスコの中だけにはとどまらず、工業、生命、地球、そして宇宙まで広がっています。そんな化学ですが、実はその裏側には「全ての物質は原子からなる」などの普遍的に成り立つ法則が存在します。そのような普遍性を追求する科学者に私はなります。

現在は物理学科と化学科の研究室にて、生体分子モーターを統計力学の観点から解析することと、量子コンピュータを化学へ応用することの2つに取り組んでいます。また、大学1年生のときに立ち上げた団体「Scientia Meetup」では、分野と大学の垣根を越えた学生間の交流を全国レベルで行っています。夢を叶えるために情熱を燃やし続ける科学者に、きっとなります。

理学部 3年
八木（やぎ） 俊輔（しゅんすけ）

日々活動を配信しています。是非フォロー・イイネをお願いします！

SNSでも最新情報をお届け！ @kyudaikikin @iwa1859p

本年7月に発行しました九大広報 129号のP.21山川賞受賞者インタビューに誤りがございました。以下のように訂正し、ここに謹んでお詫び申し上げます。

訂正箇所	P.21インタビュー 10行目	誤：私は6歳から中学校を卒業するまで米国で生活し、（以下略） 正：私は6歳から小学校を卒業するまで米国で生活し、（以下略）

九州大学基金 INFORMATION

多くの寄附者のみなさまのご支援により、今回ご紹介している学生を対象にした支援助成事業を年間1億円規模で実施しています。詳しくは九州大学基金のホームページをご覧ください。

https://kikin.kyushu-u.ac.jp/

山川賞について

山川健次郎初代総長の名を冠した賞であり、九州大学教育憲章が指向する人間性、社会性、国際性、専門性について優れた志を持ち、学業成績が優秀な学部学生を選考し、次世代を担う若者を育てることを目的とした事業です。